Grow Up ～サクラ咲け～

あさぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｇｒｏｗ　Ｕｐ　～サクラ咲け～

【Ｎコード】
Ｎ４２３５Ｖ

【作者名】
あさぎ

【あらすじ】
不思議な力を秘めた鉱石、レザルトが発見された世界
その力はやがてスポーツに活かされるようになり、剣術という種目が世界中の人気を博していた。
そんな世界に住んでいる、平凡（？）な主人公の妃桜悠翔は、とある事件をきっかけに１人の少女に付きまとわれるようになり――

「私に剣を教えてください、師匠！」

一応モバゲーのを修正しての投稿ですが、まあ非公開設定なんで関係ないですね↑
ぼちぼち更新なので、気長に付き合ってください↑

prologue ～始まり～

頭の中は真っ白だった

何が起きたのか、理解出来なかった

ただ

少女が血を流してぐったりと倒れている

そんな光景をただ茫然と眺めていた

その手に血の滴る刀を持ったまま

――もう何度この光景を見ただろうか

通行人が気付いた

それから、あちらこちらから怒号や悲鳴があがる

まさしく阿鼻叫喚の地獄絵図

――忘れたくても忘れられない、忌まわしい記憶

それもそのはず

それは、目の前の光景はあってはならないものだから

だが、その叫びすら自分には届かない

どのくらい時間がたったのだろうか

通報を受けて来たのであろう救急隊員が飛び出てきて、処置を始めた

それを見届けることなく途絶えそうになる意識の中、思った

――もううんざりだ

――――――――――――――――――――――――

「ねえ、聞いてる？」

目を開けると、そこは一面桜が咲き誇っていた

中でも一番大きな桜の木の元には、さっきとは違う少女

顔は逆光なせいか、よくわからない

年はまだ小学生ぐらいだろう

少女はくすくす笑う

「もう、本当に抜けてるんだから」

君は誰？

そう訊こうとするが、声が出ない

「約束……だよ？」

少女は構わず言葉を続ける

約束？　それは何？

またしても声は出ない

「あなたが――」

その瞬間、風が吹いた

それは桜の花びらを舞わせ、その続きをかき消してしまう

それでも、何故かその言葉を理解出来た気がした

それで悟った

これもまた夢なんだと――

ｍｅｅｔ　～それは唐突に～（前書き）

やたら行変えが多いですが悪しからず↑

meet　～それは唐突に～

「……翔君、悠翔君！」

体がゆさゆさ揺れている。

今度は一体何なのだろう？

目を開け、突っ伏したまま顔だけを横に向け震源地を確認した。

「あ、やっと起きた？　おはよ～」

そこにいたのは、よく知った少女だった。

「……お休み」

「ふぇっ、ち、ちょっと何でまた寝ちゃうの～！　起きてよ！」

「眠いんだ」

「それは3、４時限目の間ずっと寝てた人の発言じゃないと思うよ……」

そう言われて初めて、今が昼休みだという事に気づいた。

「ほらっ、みんな待ってると思うよ」

「わかった、わかったから」

幼なじみに手を引かれ、頭がはっきりしないまま、食堂まで連行されるのだった。

――――――――――――――――――――

頭がはっきりしたのは、結局食堂で昼食を注文し、いつもの席に座った頃だった。

しかし、時既に遅し

「ねえ、誠二？」

「なんだ？」

目の前の昼食を穴があくほどみた後、前の席にいる親友の1人、荒井誠二に訊く。

しっかり者で、まさに頼れる人。

体つきもよく、運動もなんなくこなす。

そんな常識人の誠二だからこそ訊くんだよ……っ。

「……これ、なんだと思う？」

「何って、蕎麦だろ？」

いたって冷静に返された！？

「いや、確かにそうなんだけど……」

上にコロッケが乗っている
そう、天ぷらではなくコロッケ
上にコロッケが乗っている蕎麦なんてないんじゃないのだろうか。
「なんでコロッケ……」
「それ、看板メニューらしいぞ？　確かアイデア募集したとか言ってたが」
「これで看板メニューって……」
出汁のせいでコロッケは見事にぐずぐず。
お世辞にも美味しそうには見えない。
ここの食堂のおばちゃんは一体どうなっているんだ。
「私の記憶が正しければ……」
その声は、自分から見て右前にいるもう1人の親友、西沢詩織のものだった。
「確か元ネタでも、それは不評だったような……」
「そんな情報いらなかったよ……」
ただでさえあまり食べたいと思ってないのに。
くそぅ、なんで僕は寝ぼけたまま食券買ったんだ！

というか、なんでその不評のメニューが看板……

「んで、その元ネタってなんなんだ？」

おっと、誠二がちょっと関心を寄せたみたいだ。

「あ、はい。野球ゲームなのですが……、やっぱりちょっと違いますかね？」

「はっきりしないな」

「だって、うなぎパイでバトルしたりしたりもしてますし……」

「それは……、どうなんだろうね」

「『それは逆にお前の方がうなぎパイに食われたということさ』という素晴らしい名言を残してたり」

「めちゃくちゃカオスだな……」

誠二が若干引いている。

僕も同じ気持ちだけど。

「何言ってるんですか。あれは名作です。泣きゲーなのです。」

憤慨してるようだけど、取り乱さず冷静に抗議をする。

冷静な分、余計に怖かったりする。

西沢さん、華奢だし、大和撫子という言葉がぴったりくる綺麗な人なんだけどなぁ……。

蓋を開ければ、俗に言うオタクだ。

主に、ゲーム……らしい。

というのも、本人談であり、深く追求するのはなんか怖いので、3年間友達としてつきあっている今でも詳細は不明だ。

まあ、それでもインドア派というわけではなく、運動神経が良く、意外にアグレッシブだったりする。

でもゲームか……、最近やる事ないし……。

「ねえ、西沢さん。今度そのゲーム貸してくれないかな?」

「はい喜んで、妃桜さん」

急に目をキラキラさせて頷く西沢さん。

「……チャレンジャーだな」

「それはどうも」

蕎麦を食べつつ投げやりにこたえる。

いい加減食べないと、のびてしまう。

「そういえば、立花は一緒じゃなかったのか？」
誠二がそんな事を聞いてくる。
今気づいたけど、誠二はおにぎり、西沢さんはサンドイッチ……なんだこの軽食組は。
「葵はもう少しで来ると思う、何買うか迷ってたみたいだし。」
「ところでですね、妃桜さん」
西沢さんの目が、怪しく輝く。
「……何かな？」
これは絶対によくない事が起こる前兆だ。
今まで何度やられてきたか考えたくもない。
今度は一体何を―
「そのメニューを提案したのは私ですよ」
「お前かーーーーっ！」
思わず叫んでしまった。
周りが何事かと、視線を向けてくる。
「何、何事なの～！？」

そんななか近づいてくるのが1人。
いつものほんわかした雰囲気なんてどこへやら、涙目になりながら駆け寄ってくる。
まるで世界が終わる宣告を受けたかのようだ。
実際そうなった場合に出くわした事がないからよくわからない、というか今後一切ないだろう。
「な、なんでもないよ、葵」
とりあえず取り繕う。
「ほ、本当に？　あんなに大声で叫んでたのに？」
「いやまあ、取るに足らない事だったって思ってよ」
「そう？　ならよかった～」
本当に安心したようにニコニコと顔を緩ませる。
いつもの5割増でほんわかした雰囲気になる。
「しかしまぁ」
誠二がニコニコとパフェ（これは昼飯なんかじゃないだろうという突っ込みは受け付けておりません）を頬張る葵を見てしみじみ言う。
「悠翔にこんな可愛い幼なじみがいたなんてなぁ」

「ふえ？」

「そうですね、特徴がない事が特徴な妃桜さんには勿体ないくらいです」

「散々な評価だね……」

言いたい事好き放題いってくれるよ本当に……

「そんな事ないよ」

苦笑いしている僕に向かって、葵はいつものように断言する。

「悠翔君は、誰にも負けないくらいいい子だよ」

「葵……、くすぐったいからそういうのは止めて……」

聞いてるこっちの方が恥ずかしくなる。

「あー、熱い熱い、相変わらず仲のよい事で」

手をパタパタしながら誠二は言った。

「当たり前だよ、だって私は悠翔君のお姉ちゃんなんだからね」

エヘンと胸を張った。

そんな葵に一言。

「……、頬にクリームついてるよ」

「ふぇぇぇ！？」

お姉ちゃんにはまだまだ遠いようだった。

――――――――――――――――――――――――――――

キーンコーンカーンコーン

「やっと終わった……」

「先に行ってるね」

「あっ、待ってよー」

最後の授業の終わりを知らせるチャイムが鳴り、辺りは一気に喧騒に包まれる。

それはもちろん、クラス……いや、ここの生徒の大半にとっては今からが本番だからだ。

ここ西城高校は全国有数のスポーツ校で、全校生徒の約2割を全国から優秀だった中学生を推薦で取っている。

さらに、設備が段違いにいいから部活動を中心に考える生徒が入学しにくる。

結果生徒の半分以上は部活が楽しみな人になるわけであって

「う～んっ！　さてさて、私も行こうっと」

隣にいる葵（授業中は寝ていた）が、背筋を伸ばして立ち上がる。

「頑張ってね」

「うん、私頑張っちゃうよー！」

葵もその例に漏れない1人だ。

何をしているのかと言うと

「期待の星なんだよね、剣術部の？」

「えへへ、そんなに褒めても何も出ないんだよ？」

「葵の出すものには期待してないから大丈夫だよ」

「酷い！？」

剣術とは、最近一大ブームになっているスポーツだ。

「でもね～、私にはちょっと期待してる事があるんだよ～」

「？」

一体何を期待していると言うんだろうか。

「私はね～、悠翔君が剣術部に入ってくれればな～って。　そしたら、私はもっと頑張れる気がするんだっ」

ズキッ

「残念ながら、僕は帰宅部を退部する気はないよ？」

胸の痛みが走るけど、顔に出さないように僕は冗談めかして笑う。

「そっか～……」

葵は残念そうに肩を落とした。

でも直ぐに立ち直ったようで。

「よ～しっ、じゃあ悠翔くんの分まで思いっきり練習してくるね！」

「いってらっしゃい」

「うん！」

いつもののほほんとした雰囲気はどこへやら、目にもとまらぬ速さで教室を去っていった。

「やれやれ……」

ひとりごちに呟く

「ごめんね、葵……」

僕は

剣術は無理なんだ……

――――――――――――――――――――――――――――――――

葵と別れた後、僕は1人で帰路についていた。

誠二は柔道部、西沢さんは水泳部とみんなそれぞれ部活動に勤しんでいるので、必然的にこうなる。

ただ、寂寥感があるのは、1人でいるからではない。

「葵……」

久しぶりに再会した幼なじみ。

正直また会えるとは思ってもみなかった。

その人に、まだ自分は本当の事を言えていない……。

自分は……、自分は――

「きゃーーーっ！」

突然響き渡る悲鳴

案外近かったからだろうか、思わず走って悲鳴がした方へ走る。厄介事には関わらないでいようとは頭では思っていても、勝手に動いてしまう自分の性格が恨めしい。

やはりそこは近い所で、若い女性がへたりこんでいて、警官1人が倒れていた。

警官の方を確認したが、命に別状はなさそうだ。

「どうしました？」

「ひ、ひったくりです！」

彼女の指差した方向には、犯人と思われる男が遙か彼方にいて、人間とは思えない速度で走り去っていく。

その右手にはナイフらしきものがかろうじて見える。

だが、そのナイフは普通のとは似てもにつかない、透き通った緑色、まるでエメラルドのような色をしていた。

「アレは……、精錬鉱（レザルト）か……っ」

反射的に顔をしかめてしまった。

精錬鉱（レザルト）とは、個人差はあるものも、持っている人の身体能力を著しく上昇させる、まさに夢のような石の事だ。

最初の内は、軍事利用出来ないかと各国がこぞって研究したもので、大変注目を集めたものだった。

ただ、実際はそう甘いものではなかった。

この石、何故か近接武器として使えるようにならないと効果を発揮してくれないのだ。

しかも、持っている場合限定。流石にこれでは使い物にはならず、

軍事利用は実現しなかった。
しかし、レザルトを使っての犯罪が発生するようになった。
いくら使い勝手が悪いと言っても、小型拳銃の弾ぐらいなら当たった所で対したダメージにもならず、ましてそれ相応の使い手なら弾自体を叩き落とすほどの動体視力をも得られる。
こんなに便利なものはない。
各国は早急にレザルトに規制をかけ、簡単には出回らないようにし、警察官にも同じものを携帯させ、事態に備えたが、それでも手を焼いている。
そこまで思い出して、辺りをみると近くにレザルトで作られたのだろう警棒が転がっていた。
持ってみると軽い。
万が一の怪我の事を考えて、最軽量化して、衝撃でこちらが潰れるようにしているはずなので、そう何回も叩ける代物ではない。
これには触りたくはなかった。
だけど
「くっ……」
迷ってる暇はなかった。
警棒を握りしめ、そして地面を蹴り、近くの”アパートの屋上”に飛び移った。

そこから、屋根づたいに犯人が逃げた方向へひたすら走る。
さっきは見失ったが、強化された視力は再び犯人の姿を捉えていた。
そこへめがけて一気に走る。
すると犯人は、追跡に気付いたのかそれともたまたまなのか、狭い路地裏に入っていった。
「くそっ」
その裏路地の入り口まで来たが、犯人の姿はない。
どうやら複雑に入り組んでいるようだ。
「もう一度上から……」
探すために、建物の上に跳ぶ。
と
「うわぁぁぁあ！？」
その前に今度は男の悲鳴が聞こえた。
疑問に思うよりも先に体が動いていた。
悲鳴を上げた方へと駆ける。

その場所は、存外近くだった。

そこには、男が倒れている。

それとは別に、もう1人、少女の姿があった。

「ふぅ、初任務コンプリートっ！」

ｂｅｇｉｎｉｎｇ　～動き出す刻～（前書き）

※題から用語まで、ネーミングセンス皆無なのは仕様です↑

ｂｅｇｉｎｉｎｇ　～動き出す刻～

悠翔はある意味呆然としてしまった。

ひったくりを倒したのが、少女だったという事もある。

剣術の大会等では、男女はわけられていない。

それは、勝敗は元の腕力より、レザルトの力をどれだけ引き出す事が出来るかにかかっているからだ。

だが、それでも圧倒的に男の方が強いのが現実だ。

しかし、ほんの数人、男に勝る強さを持った女性も存在する。

まさかこの人も……

自然と警棒を握る手に力が入る、と

「っ、誰！？」

少女が悠翔の隠れている壁の方へ振り向く。

気づかれてしまったようだ

元々隠れる必要もなかったので、悠翔は姿を現す。

「あなた……、誰？」

「いや、犯人を追って来たんだけど」
特に嘘をつく理由もないので正直に答える。
「そう、じゃあコイツのお仲間ってわけね……」
とんでもない勘違いをしていたっ！？
「いや、ちょっと待っ―」
「その警棒、警察から奪ったのね！」
「違うよっ！？」
「つべこべ言わないで！　神妙にしなさい！」
取り付く島もなく、少女は持っていた刀で襲いかかってきた。
「ああもうっ！」
あわててかわす。
本当は警棒で刀と打ち合う事も出来そうだけど……
へこむよな……これ……。
「まだまだっ！」
少女はさらに刀を振りかぶり、斬りつけてくる。
それをかわすことは、それほど難しいことではなかった。

確かにそれなりには早いものも、少女の刀捌きはただ無闇に振り回すだけで、太刀筋もなにもない。

それを避けることなど、造作もないことだった。

しかし

どう見ても素人だよな……

どうやってひったくり犯を倒したのか謎が深まるばかりだったが、それよりも―

「避けるばっかりなんて卑怯よ！」

「いや警棒じゃ打ち合えないって」

いつまで続くんだろ……。

長期戦になりそうな予感に、悠翔はため息をついた。

―――――――――――――――――――――――――

「はぁ、はぁ、なんて人なの……」

ひったくり犯を捕まえて、初任務を無事に終えたはずなのに、なんでこんな事になってるんだろう……。

自分の運の無さに辟易する。

今、ひったくり犯の仲間が現れて、ソイツを捕まえようとしている最中だ。

ひ弱とは言わないけど、どうみても強そうな見た目はしていないのだけれど、意外に強い。

やっぱり、私じゃダメなのかなぁ。

そう思うと、涙が零れそうになる。

それをなんとか振り払い、元凶をにらめつける。

「泥棒のくせに、泥棒のくせに……っ」

「いやだから僕は仲間じゃないって」

まだあんな事を言ってる。

私が一生懸命刀を振っている時も、ずっとその一点張りだった。

警察が持ってるはずの警棒持って、こんな所に現れたていて、仲間じゃないはずがないじゃない。

「問答無用よっ！」

耳を貸す必要なんかない、捕まえる事だけに集中しよう。

そう思い、再び犯人の仲間に向かって駆ける。

一瞬

仲間が何かに気を取られた。

ここしかない、やっと見つけたチャンス！

刀を振りかぶって

「もらっ―」

「やりやがったなこのアマっ！」

「えっ……？」

気づくと、さっきまで気絶していたひったくりが、ナイフを振りかざしていた。

いつの間にか起き上がっていたらしい。

仲間の方ばかりに気を取られて気づかなかった……っ！

思わず目をつぶってしまう。

……ああ、私死んじゃうのかな？

私みたいな素人が、攻撃を受けたりしたら本当に死んでしまいそうで。

ただ、自分の弱さが恨めしくて

思わず、呟いてしまった。

「お姉ちゃん……」

私の憧れの人。

目標の人

大切な人

ごめん……ごめんね……

そのまま来るはずの衝撃をただ待つ。

しかし―

……あれ？

いつまで待っても衝撃は来なかった。

「やっぱり素人だったんだね……」

犯人がいるはずの方から、あの仲間の声がする。

恐る恐る目を開けると……

あの仲間がすぐそばに立っていて

その足下では、さっき襲ってきた犯人が見事に伸びている。

よく見ると、仲間が持っていたはずの警棒は、砕け散っていて、既

に原型を留めていなかった。
これから察すると……
まさか本当に仲間じゃなかったの！？
「助けて……くれたの？」
「うん、まぁそうだね」
さっきまで犯人の仲間だと思っていた人は苦笑いを浮かべていた。
うわぁぁぁぁっ、私ってばなんて事を……っ！
あまりの恥ずかしさに顔が真っ赤になる。
本当に犯人の仲間じゃなかっただなんて！
「ごっ、ごごごめんなさいっ！あのっ、そのっ」
「誤解が解けたなら何よりだよ」
その人は、そのままそっと手を差し出してくれた。
「立てる？」
「……はい」
私はその手を迷うことなく取っていた。

「あのー」

「おーい、大丈夫かー？」

少し向こうから、声が聞こえてきた。

「げっ……」

すると、何故かその人は顔をしかめた。

そうこうする間に、やって来たのは私の上司さんだった。

「良かった、大丈夫だったみたいだな」

「はい、この人が助けてくれまして」

「おお、それは良かった良かった、なにせ奴は手練れ常習犯だったから、お前では心配だったんだが」

なんて失礼なことをいう始末。

「いやいや、うちの部下が迷惑を……って、悠翔くんじゃないか」

「えっ？」

この人の事知ってるの！？

「……お久しぶりです、斑目さん」

「いや本当に久しぶりだね、3年ぐらいかな、元気にしてた？」

「えぇ、まあ……」

歯切れわるそうに答える悠翔さん。

「じゃあ、僕はこれで。後はよろしくね」

「え？」

と、いうや否やさっさと帰っていってしまった。

あーあ、色々聞きたいことあったんだけどなあ……。

――――――――――――――――――――――――

「さてと、犯人も捕まえたし、私たちも帰るとするか」

犯人を拘束して、警察に引き渡したあと、斑目さんはそう言って踵をかえした。

「あのっ！」

「ん？」

「悠翔さんってどんな人なんですか？」

どうしてもあの人の事が知りたくて仕方がない。

自分でもよく分からないが、今あの人の事を知る手がかりはここにしかないのだ。

しばしの沈黙のあと

「そうかいそうかいっ」

そう言って、愉快そうに笑いだす斑目さん。

「私が知ってることなら話そう、いや、若いっていいねー」

斑目さんの言ってる意味よくは分からないが、話してくれるらしい。

「ぜ、ぜひっ！」

自分の中で、何かが動き出した。

そんな気がした。

ｔｒｏｕｂｌｅ　～乱される日常～（前書き）

今回は短いですがご了承を・・・

ｔｒｏｕｂｌｅ　～乱される日常～

「私に剣を教えて下さい、師匠っ」

目の前には、昨日あったあの少女がいる。

机を挟んで向こう側に。

突然の来訪者に周りはざわざわしている。

「あの子誰？」

「妃桜くん、彼女いたんだ……」

「てっきり橘さんと付き合ってるって思ってたのに……」

「くそっ、帰宅部の妃桜のくせに……っ」

……いろいろツッコミ所はあったけど、今はそれどころではなかった。

「えー……っと？」

「取り敢えず、外に出ましょっ」

そう言って、手を強引に引っ張られて、みんなの注目を一心に受けながら教室から連れ出されていく。

ふと、葵が視界に入った。

ポカーンとして、微塵も動かず固まっていた。
一体何がどうなっているんだ……

―――――――――――――――――――――

「で、どういうつもりなのかな？」

「ですから、剣術を教えて欲しいんです」

「……冗談だよね？」

「本気です」

……頭が痛くなりそうだ。

「なんで僕なの？」

取り敢えず、一番の疑問だった。

「昨日斑目さんに色々と師匠のこと聞いたんです」

「はぁ……」

何となく合点がいった。

だが、彼女はこちらの様子には気づいていないのか、更に続けた。

「師匠が凄腕の”ハンター”だってことも、バイトにしては破格の待遇で、他の地域に駆り出されることもあったっていうこともです

！」

「……昔の事を掘り返されるのは正直嫌なんだけど」

自分でも驚くほど、冷めたような声音だった。

「……はっ、すすすみません」

途端に小さくなる少女。

「で、でも、どうしても気になったといいますか、もう師匠しかいないと思いまして……」

それでも必死になって弁解している。

その光景に……既視感を覚えた。

どこか、どこかで同じような……

そうしばらく考えて、ピンときた。

（ああ、なるほど……）

心の中で笑う。

そうだ覚えがあるに決まってるじゃないか。

それはまさに、昔の自分のようなのだから。

ただ強くなりたいという一心で教えを乞うその姿は、まさしく過去

の自分そのものだった。（朔夜さんもこんな感じだったのかな……）

そう思うと懐かしさを感じ、思わず笑ってしまった。

「クスッ」

「どうかしました？」

「うん、まあいいかな……」

「？」

少女はよくわからないと言った表情で首を傾げている。

「ううん、なんでもないよ。わかった、僕に教えられる事があるなら尽力するよ」

「え……」

何を言われたのかわからないといった様子でしばらくポカンとした後

「……ほほほほ本当ですかっっ！？」

身を乗り出して顔を近づけてくる少女。

周りの客が何事かとこちらに注目している。

あまりの近さと、周りの視線耐えられず、に思わず声がうわずってしまう。

「う、うん、でもちょっと近い……かな？」

「あ、あぅ…すみません……」

言われて初めて気づいたようで、顔を真っ赤にして再び席についた。

「それでね、えーっと……」

そこで、自分はまだ彼女の名前も知らない事に気づいた。

というか、新米ハンターというぐらいしか知らない。

（そんな相手の師匠を引き受けた僕って一体……）

「あっ、すすすみません、そういえば自己紹介がまだでっ、でした」

慌てて若干噛んでいた。

「私、付属中学1年の沢城優花といいます。よろしくお願いします、師匠！」

ｔｒｏｕｂｌｅ　～乱される日常～（後書き）

本当はここまで前話に入れるべきでしたね・・・（^__^;）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4235v/

Grow Up ～サクラ咲け～

2011年11月14日00時09分発行